

3/
22
(日)

偽りの言葉と神の言葉

詩編一二編

主の仰せこそ清い仰せ。

土の炉で精錬され、七度純化された銀。(7)

詩人の周りでは、偽りが横行し、人々は平気で不真実な言葉を語り、自分の利益のためにひたすら権力者にへつらう言葉が交わされてきました。人間の言葉が本来の機能を失う中で、今日の聖句にあるように詩人はなお神の言葉の真実に希望を見いだします。銀などの鉱物が繰り返し精錬されることによって一切の不純物が取り除かれ、純粹なものにされるように、神の言葉は不真実な部分が全くない「清い仰せ」であると語ります。混沌とする社会の中で、人生を支える真の基盤は神の言葉だけであるとの信仰を新たに、詩人は生きることへの希望を回復しました。神の言葉はどんなことがあっても、私たちを裏切ることはないからです。私たちは不真実な人間の言葉により頼んで生きるのではなく、真実なる神とその言葉に人生の土台を確かに据えて生きる者たちでありたいと願います。